

生きているということ：初めてのアフリカで思ったこと

動物応用科学科3年 野口なつ子

「いつも雇っている現地のドライバーが誘拐されて、身代金を要求されている・・・。」

夢見ていたアフリカへいざ出発。期待に胸を膨らませ、羽田空港に到着後、この事実を知った。この先どうなるのか心配でならなかった・・・。

私は、2月15~25日までスタディーツアーでケニアに行った。このスタディーツアーは、ケニアのナイロビで働く日本人獣医師・神戸俊平先生によるものである。神戸先生はマサイ族の家畜の診療、野生動物保護・ゾウの密猟防止、開発による環境影響の問題提起、エイズ患者のカウンセリングやストリートチルドレンへの給食活動をしている、私の憧れている人の中の一人である。

8人の参加者のうち6人は日大生、もう一人はまだ会ったこともない鹿児島大生。ひとみしりの私は、不安でならなかった。しかし、最初はアフリカに行きたいという思いが強かったため、そんなのは関係なしに参加を決めた。

このスタディーツアーに参加したのは、大自然に生息する野生動物をこの目で見たかったからとマサイ族に会いたかったからであったが、何よりも、「私のこれからのビジョンを立てる」ということが最大の理由だった。出発前の私は環境に関する仕事がしたいと考えていたが、本当に自分がやるべきこと、やりたいことが何なのかわからなかった。だから、その答えを探すためにアフリカへ飛んだ。

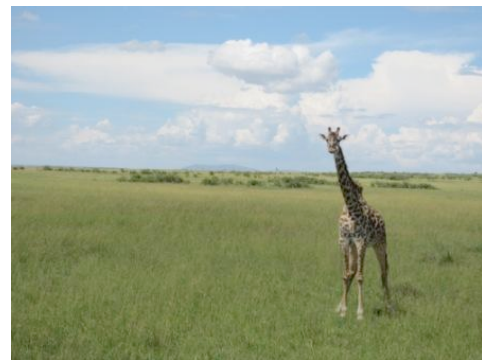
アフリカの大地へ

ナイロビにはお昼頃到着した。計17時間も飛行機に乗って疲れた体には厳しい暑さ。ホテルに着くまで車の中でナイロビの空気、風、音、においを感じながら外を眺める。しかし、なぜか夢の地“アフリカ”に来たという実感はあまりなかった。

ホテルに着くと、シャワーも便座もない、お湯さえ出ない部屋に泊まった。水が出ればいいほうだと思いながら、ゆっくり体を休めた。

2日目は、ナクル国立公園へサファリをしに行った。あいにくの雨だったが、なかなか楽しいものだった。米粒くらいであったが、野生のシロサイを見ることができた。その日は、ライオンが近くにいるところでテントを張り、キャンプファイヤーをしながら暗闇で料理人のおっちゃんを作るごはんを食べた。暗闇に光るランプの光をぼんやり見ながら飲むチャイは格別においしかった。なんとも時間がゆっくり流れているようだった。

3日目はマサイ・マラの国立公園へサファリをしに行った。入り口で、マサイのおぼち



さんたちが土産物をぶら下げて、わらわらと私たちが乗る車を囲む。「10\$、テンダラー、テンダラー」と叫びながらしつこく売ってくる。私は押され負け、7\$に値切ってブレスレッドを買った。すると、「もう1\$くれ」と言ってきた。またまた、押され負けした私は1\$を手渡した。観光客がお金を落とすことで成り立つ社会で暮らすマサイのおばちゃんの根強いエネルギー、生きる強さを感じた。この日はすぐ下の池に巨大なワニがいるテントに泊まった。トイレには便座がついていてシャワーのお湯も出ることに喜びを感じた。そして、広大な自然を思い浮かべながら静かに目をつむり、眠りに就いた。

落とし穴

4日目は、約6時間のドライブをしながらマラ・ウェストという地へ向かった。ドライブの途中、ずっと外を眺めていた。働く人、仕事もなくフラフラする人、道端で日向ぼっこする人などいろいろな人を見た。そのとき、初日に感じた違和感を思い出した。「夢の地“アフリカ”に来た実感が無い」と感じた理由がなんとなくわかった気がしたのだ。それは、ケニア人も日本人となんも変わらなかったからだ。生きるために働き、人々はみな助けあい生活している。その姿を見ると、なんだかケニアに来た気がしないのだ。私が思い浮かべていたイメージだと、もっと貧しくてごはんも十分に食べられず、やせ細っている人が多くいるのかと思っていた。しかし、それはただの想像であって現実ではなかったのだ。ここにきて、私がこの地でできることなんてない、誰も私たちの力など必要としないと思ってしまうほどであった。アフリカで人々のために活動したいという考えは、一

瞬にしてナイロビの風と共に消えうせた。

この日はとてもきれいなロッジに泊まった。もちろん、便座はあるし、お湯も出た。おまけに、テントの周りをレンジャーが監視してくれているという。そしてその晩、ロッジでフレッシュな野菜を口にした。おまけに水も……。うん、うまい。

5日目、朝起きた途端に激しい吐き気と腹痛に襲われた。今日は、あこがれのマサイ族との交流の日なのに……。と思いながら、トイレでうずくまる。どうやら、昨日食べた野菜や水にあたってらしい。水が汚い所では、生野菜もカットフルーツも食べないほうがいいとは知っていた。しかし、ムシャムシャ食べる神戸先生を見ていたら、変な安心感がわき食べてしまったのだ。こうして、8人中6人が体調を崩した。

生きることのかっこよさ

待ちに待ったマサイ村訪問だが、前半はダウンしてしまった。貴重なヤギを1頭食べさせてくれるということだったが、私は口にするができなかった。ここまで来たのに悔しくてならなかった。車の中は蒸し暑く、汗が流れ、悔しさと吐き気が入り混じっていた時、私の耳に飛び込んできたのは、“マサイの歌声”だった。テレビでしか聞いたことのない歌声が、今、すぐ近くから聞こえてくる。



無理してでも「あいたい!」、そう思い、胃の中にある悪いものたちをすべて吐き出し、私はマサイの元へ向かった。そのとき道案内をしてくれたのが「ジェームス (17歳)」であった。彼と少し話をしたり、写真を撮り合いっこしたりして、仲良くなった。

その後、火のおこし方を教えてもらったり、弓矢の練習をさせてもらった。家の中も案内してくれた。彼らは伝統を守り続け、大自然の中で野生動物と共存しながら、無駄なものを取り入れずに生活している。たくましく生きる姿を見て「カッコイイ」と思った。これが人間らしい姿なのだと実感した。私が思う人間らしさってこんな感じなんだ。「生きる」ってこういうことだと強く思った。人それぞれ人間らしさを感じるものは違うけれど、私が思う人間らしさっていうのはマサイ族のように生きていける最小限の生活のことだと心の底から思った。

子どもパワーとおやじパワー

6日目、再び約6時間のドライブの末ナイロビに戻ってきた。ここで陽気で明るいドライバーと料理人のおっちゃんと別れた。ドライバーの運転は安全運転で、長旅で疲れている私たちを笑顔にしてくれた。そして、料理人のおっちゃんの料理はどこの料理よりおいしく、私たちを笑顔にしてくれた。また会える日を楽しみにホテルで静かに休んだ。

7日目、丸一日この地にいられるのも今日で最後となった。いつものようにチャーターしたバスは30分遅れで到着。ここの人たちはPole Pole (スワヒリ語でゆっくりゆっくりという意味) している。午前中はゾウ孤児院と動物孤児院に行った。午後はお巡りさんにガイドしてもらいながらスラム街に行き、子ども

たちと一緒に国立博物館へ行った。子どもたちのパワーはものすごく大きなものであった。バスに乗るのにも一苦勞。みんな我先にと押す。そしてバスの中で大声で歌い始める。国立博物館でも元気に走り回り、私たちにしがみついて離れようとしな。おかげでくたくたになりながらも子どもたちの宝石のような目から希望とパワーをもらった。少しの間一緒にいただけなのに、かなり疲れてしまった。それほどのパワーが彼らにはあるのだ。

次に、くたくたのまま毎週火曜日に行われているマサイ・マーケットというお土産屋さんがたくさん並ぶマーケットに行った。ここでも根強く生きる人々に出会った。

「トモダチプライス」と言っ、知らないおじさんたちが私たちを囲む。このおじさんたちはどうやらねこばばするらしい。お店の人ではないのに勝手に値段の交渉を始め、いろいろな店へ引きずり込ませる。私にも4・5人のねこばばおじさんたちがついて回る。疲れてるしゆっくり買い物をしたかった私にとって、その時はよいものではなかった。日本語で「友達じゃないし」って文句を言いながらも買い物を続け、やっと気に入るピアスを見つけた。店のお姉さんと値段の交渉をするが、ねこばばおじさんたちが間に入ってくる。お姉さんとねこばばおじさんがもめ始め、怖くなって値切るのも忘れてさっさとピアス



を買って走って逃げた。しかし、ねこばばおじさんは追いかけてくる。そして、ねこばばおじさんは言った。「もう君は友達じゃない」と。悔しかったから「もともと友達じゃないし」って日本語で言い返しておいた。怖かったけど、楽しかった。生きるために必死なんだということが分かったから、今となってはとてもいい経験だ。

旅を振り返る

8日目、出発の日。空港へ行く車の中でこの旅のことを考えていた。最初は、ケニア人は日本人と何も変わらなくて、私たちの助けを必要としていない、私が出る幕なんてないなというのが答えだった。しかし、最終日もなるとその答えは決して正解でないと、考えが変わった。誘拐されたドライバーは外国人が活動するのを見て、自分たちも何かしな

くてはならないと感じ、スラムの子どもたちを国立博物館に連れて行ってあげたりしているらしい。何もする必要がないなんてことはない。こうやって現地の人に刺激を与えることができるのではないかと思い、なんだかやる気がわいた。

胸躍る思い

もっと現地の人と話して交流したい。そして、日本人にアフリカのよさを知ってもらいたい。だから、勉強する！英会話もスワヒリ語もアフリカのことも勉強する。勉強することに対して胸がはずみ、考えるだけでワクワク、ドキドキするのは生まれて初めてのことだ。初めての体験を無駄にしないように、この気持ちを忘れないように、生きることに根強く、一步一步前進していきたい。こんなにも胸が躍ることはない。